

直感（１）

1.そこへと向かうのではなく、すでにここに在るその時を力強く安定させるという、どこにも過去の無い、原因だけの世界。これまでの身体表現も、そこでの原因の高まりも、ここと繋がっていて、そのままそれは変化に乗り、次なる未来の普通の中で仕事をし続ける。ただそうである自分と、そうである風景が呼応し合い、回転し、地球本来は元気になる。

蛇絡みの原因の深さとその影響は、「再生」や「地球の真意」を通して誰もが認識し、そこでの EW を通して、無くてもいい経験が次々と姿を消していく流れを人は経験する。人間にとっては、それだけで想像を大きく超えた経験となり、そのことで引き寄せられる風景は、確実にそれまでとは違って来る。心ある想いの具現化は、どこまでも続く。

であるが、仮に、事が通り過ぎるまでじっと息を潜めて、その所在(本性)を分からなくさせ続ける凄腕級の存在がどこかに居るとする。そんな存在は、どんな時でも、違和感となるような反応は見せず、全てを普通にやり過ごす。無有日記の原因にも(表向きは)抵抗は無く、いつもと変わらず、それとの融合空間の中に居る。

であれば、無有日記の無い未来空間は、酷く危うい状況を経験する。それをそのままにすることの影響は計り知れない。無有日記のある時代の仕上げ級の EW となるであろう「直感」

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

は、「地球の真意」を基礎に、それを浮き上がらせ、新たな動きを創る。人間の思考では厳しさを示さない重要な時を、未来のために通り抜ける。

2.1千数百万年前に誕生した、現在の猫の前身のような獰猛な動物。蛇の脳に入り込んだ非生命的な破壊の意思は（「再生」）、その動物の本性を簡単に取り込み、蛇と同一化させて、形無き暴力的な感情の威力をそれに身に付けさせる。その凶悪さは、傍らからはそうとは思えない分、蛇以上に醜く、影響はしつこい。

地球環境が大きく腐敗へと進み行く流れのその土台を安定させたその存在は、よりそれを万全とするために、猫を人間社会の日常に難なく住み込ませる。地球と一体化する海の動物と人間それぞれが自由に能力を発揮することのないよう、蛇絡みの人間の嗜好の世界を巧く利用して、そのことを抑圧と支配の材料とする。

その本質を隠し通す本能を備えて人間の世界に放り込まれた、猫。仕事は、蛇の代わりに、人間の直ぐ側で腐敗型の原因を増幅させること。人間と猫との同居が一般化した 800 年程前から、彼らは、上手く身を繕い、嘘を見えなくさせながら、停滞と腐敗の時を生きる。

猫は、心ある感性を潰すために人に近づき、上手く行けばそこに居て、次第に慢性化する人間の不調を愉しむ。様々な問題事も、その形無きところで密に関わり、人の自由を奪い

どこからも見た目を普通に、良識ある人としての言動をあたり前としながらも、その実、その中身は全くそうではない存在たち。その元となる姿は「再生」でも記しているが、改めてカラスやコウモリと質を同じくする人間の、その秘めた感情(本性)の影響力を知る。把握されることで動き出すその原因により、隠されたものは表に出やすくなる。蛇絡みの生を持つ存在は皆、始まりが嘘であるゆえ、原因の次元を浄化すること無しに、その形無き負の影響力に対応するのは難しい。

地球感覚の直感は、この無有日記の中にいくらでも在り、それと融合する人の中に、自由に流れていく。無有日記に触れる人との間で創られるそのタイミングもテーマも、土に水が染み込むようにして、人へと伝わり、次なる原因となって、心に溶ける。「直感」は、直感の質をどこまでも成長・進化させ、そのまま時を癒す、ありのままの原因にそれを乗せる。その面白さを、みんなで楽しむ。(by 無有 3/30 2019)

続ける。蛇系の人間にとっては、猫はとても都合の良い仲間。無意識の意思(本性)を重ね合わせて、そうとは分からせずに、好きなように人の生を操る。その姿に、人は、思考の健全さを無くす。

3.その時の異次・異空世界での手法であるが、そこでは、人間時間を生きる生命たちが感知する音の、その基となる粒子の次元が悪用される。地球感覚を普通とする人のその直感(融合)の材料としてそこに在る、クリプトン 72。何億年もの間に変質・変異を重ねた分子・原子の世界では、その元素をも驚く程に歪なものにし、そこで極度に不安定となったクリプトン(の原因)を猫は利用する。それは、生命の変化に対する非生命の停滞と破壊の道具として、形無き原因(直感)の次元で仕事をする。

そこには、蛇や蛇絡みの人間(の原因)が居て、その全てを眺めるようにして気味悪く笑っている存在も居る。生きる自由を奪われ、身動き出来ずに居る生命たちの、その切り離された本来も居る。形を生み出す形無き次元を本質とする生命世界は、嘘と狡さを無限とする猫の、その異常(凶悪)な普通に翻弄される。

陽が沈んでからの活動を主とすることで嘘を通しやすくさせる猫は、活動を休ませる人間のその頭の中に自由に入り込み、体内のある部分のクリプトンの備蓄所のようなところから、歪で破壊的な直感の原因をそこに流し込んで、その変化を愉

しむ。それはある周波数の磁力線のような役割をし、そこに四方から静電気が乗る。歴史上の幾多の悲惨な出来事には、人間の感情に秘めた残虐性を染み込ませる猫が、その原因のどこかに絡んでいて、彼らは、特等席で、何喰わぬ顔でそれらを見物する。

4. 人は、猫を好きにさせられることはあっても、自分から好みの動物として猫を側に置くことは出来ない(多くは、脳を鈍くさせられて可愛がる)。感覚が健全になればなる程、その不健全さが分かり出す、猫の世界。彼らは、好き放題出来る自分だけの空間として、人の住む場所を狡賢く占領する。

単純に比べられるものではないが、犬と猫、それぞれの吐く息を感じてみる。自分にすり寄って(懐いて)来る時と、そうではない時の猫のその原因を感じてみるのもいい。そこに、猫の本当の姿が在る。心ある風景が生み出されることを尽く阻止するその本性は、人間世界の真の普通を破壊し、心無い人間を生きやすくさせるために在る。現代における、素朴で柔らかな人の慢性疾患のその殆どは、猫との関わりの中で生まれる。

人間の住環境で、上手く居場所を手にした猫。普通に考えれば、それはあり得ないこと。彼らは、人間の感情を学び、それを操る術を磨きつつ、大人しさとあどけなさ(気弱さ)を感じさせて、人知れず人間を支配する。心ある直感を押さえ込む非道なそれを人間と繋ぎ、変化とは無縁の、動きの無い世を

地球への自動修復作用が、その次元から、滑らかに、力強く動く。

通るべき道を通り、触れるべきことに触れる中で辿り着いた、「直感」。それまでのひとつひとつの原因の積み重ねは、次なる大きな原因となって、これまでを浄化し、新たな次を創り出す。すき間無く、何度も重ね、増やした(密度を高めた)それは、形無き原因の世界を、自由に、くまなく見渡せる程になっている。それが意味するのは、全てを含めた生命世界の、その真の変化の創造。「人間」も「仏陀の心」も、「再生」も「復活」も、そのための土台の中に溶ける。

8. 「地球の真意」での、生命としての体験的知識は、世の原因の次元を、生命本来のそれで可能な限り埋め尽くす。繋がる回路を分断され、その活力を鈍くさせられた、蛇絡みの非人間性の本質は、より具体化するその凶暴さと共に、凶らずも、隠し通せていたはずの嘘の内実をさらけ出す。それが、猫とカラスとコウモリである(うごめいている存在は、他にも居るが…)。

猫よりもカラスの方が手強く、それよりもコウモリの方が強烈である。心ある普通の人は皆、それらの影響を受けていて、そうであることの自覚も無く、厳しい時を生きる。順を違えずに、処理すべきことを処理しつつ、その原因を浄化する。それぞれの手前には、そのためのEWの基礎が在るゆえ、淡々と、着実に、この「直感」の世界を普通としていく。

い存在たちの普通。超音波による働きかけのようなそれにより、心ある人の意思表示は、力を持たずに簡単に止められてしまう。彼らは、原因不明の問題事(病気、争い)のそのきめ細かな原因でいて、その原因が決して動かぬよう、数の力と形式で世を埋め尽くす。しつこく過去に居座る結果優先の思考(価値観)を蔓延させ、それに自らの負の原因を乗せて、世の病みを愉しむ。

7.融合の主導権を握るということ。それは、ただそのままの自らの原因が、他(相手)を包み込んで一緒に回転させてしまう程の仕事をし、関わるもの全てを、本来の在るべき世界へと変化に乗せて、変えていくということ。

そのためには、あらゆる物や形のその原因深くへと入り込み、それらの皆に共通するもの、ある層や集合体の中にだけに有るもの、どこまで行っても見えにくいけど、何らかの意思を感じさせるもの…と、段階的に確実に処理すべき事の、その多次元的原因関わりの感触(体験的知識)とその浄化(融合)の経験が、絶えず積み重ねられていくことが基本となる。

次なる時の確かさのために、不確かさの中で漂う原因。その時にしか望めない感覚を通して、細かくその原因深くへと入って行く、変化の質の更新。そして、知り得る世界と感じ得る世界を同時進行で広げていく、体験的知識主導の、一生命としての経験。思考レベルの常識枠を余裕で包み込む次元に居て、生命としての何気ない直感を活躍させる。望むべく未来

支え続ける。

耳の周りで生じる音のシャワーが活動的になったのは、海の仲間との交流が盛んになったことの現れ。それを悔しい猫は、それまでの腐敗と停滞の道具(クリプトン 83、85)のその原因をふんだんに活かして破壊力を強め、その背後に居る無生命化の意思は、それを強力に支援する。しかし、そのことは返って、彼らの動きが把握しやすくなる流れをつくる。「直感」は、「地球の真意」が終了するその時を待っていた。

経験を引き連れた思考(頭)が少しでも働けば、猫は、どこまでも猫。でも、そうでなければ、猫は、化け猫よりも恐ろしい非生命の存在。その手腕には、蛇もほれぼれする。

5.蛇とその原因のところで密に繋がる猫は、人の住む世界のどこにも居て、人と一緒の家(空間)に住む。その(中身は蛇と暮らしているような)、普通一般の風景。それは、完全に変化が止まっていることを意味し、歴史はそれを物語る。そのことへの違和感の無さは、彼らと一緒に、その気もなく健康と平和を遠ざける。

人の世に有ってはならないことや、未来には残せないことへの無感覚・無関心振りは、その人の精神が猫と同一化していると考えてよい。本音と建て前を使い分けることも、体裁を整え、身を繕って生きることも皆、猫がその無意識の感情の力で教えてくれたもの。蛇はそれを喜び、生命としての変化を拒む人間も、そのことが嬉しい。猫が生み出す、心ある人間に

対する意識(重苦しい原因)の通り道は、彼らの静電気(静磁気)絡みの呪縛や攻撃の材料として活かされる。

猫は、思い通りになると、嘘に磨きがかかる。そうではないと、焦り、通るものが変わる。人間の内なる部分に癒されないままの不安があれば、猫はそれを余裕で扱い、気づけば、相思相愛の間柄が出来る。そして、人間本来という生の在り様は消えていく。

ここまで定着してしまっている、猫との風景。その変化無しには、繋がる未来も、これまでのまま。それは、人間の感情の隅々にまで浸透しているゆえ、その変化が促されることで受容することは、これまでの経験の外側。それは、人間が初めて経験する、歴史的負の原因の切り離し作業。厳しいけど、そのこと程、未来が嬉しい原因は無い。感情を動かされずに、ただ次なる風景の原因でいて、変化とは無縁の猫の次元との重なりを外す。

6. 太陽が嫌いなのに、太陽の光で温められたところに居られるのは、それだけの凶太さを備えるから。猫が居た場所を感じてみれば、本当の理由が分かり出す。すぐ側で尻尾を動かしたり、顔(鼻)を近づけたりして愛らしい行動をするのは、人間の好む姿とそれによる感情の動きを熟知しているから。その時と、そうではない時の猫の内面を感じてみれば、猫は驚き、同じようには出来なくなる。

つまり、全てが嘘。その嘘には人間はかなわないから、融合

感の世界だとすれば、否定的要素がそれに色濃く絡むものとしては、コウモリ型の人間の直感が、かなりの危うさを秘めたものであると言える。

彼らは、(人間本来としては)何もせず、不安定の安定のために必要なことは、何でも完璧にこなす。事の手前から、本来へと流れ出そうとする原因を潰し、それを行おうとする意思を破壊する。思考を一切不要とする形無き次元で、思考のみで済まされる嘘の世界を、巧みに支える。

コウモリ型人間の直感は、無意識の意思による、恐怖の超音波攻撃と言える。彼らは、地球が安心を覚える人の中に在る、心の粒子のようなものに瞬時に反応し、それへの押さえ込みを、見た目や言動を変えことなく平然と行う。体内を腐敗させても平気な程のその非人間性は、凶悪な意思の多次元的作用を普通とし、思考の外側で、静電気を自由に操り、他者の中に在る生命本来の(細胞)活動を難なく動きの無いものにする。

直感的と思える発想や思い付きは、そのための偽装の道具として使われ、脳を鈍くさせられた人は、好意的にそのことを感じ取り、思考の満足(気づき)を経験する。その背後で、好きなように人の心を止めて、事を思い通りに動かす、異常の域にも姿を見せない、コウモリと同一化した獣的直感。それは、違和感となる対象のその形無き手前のかすかな原因の動きまで把握し、それを覆い潰す。

無意識の意思の次元で、ヒ素の原因を動かす、実に恐ろし

食を遠くに、事の原因を滞らせる海塩と精白された穀物で不思議と健康を保つその姿は、不気味でもある。

直感とは、次に繋がる原因であり、止まったままの結果を動かし、浄化する、未来への形無き力である。それは、変化し続ける原因に支えられた、更なる原因。永遠の今に包まれ、融合の次元を高め、心の風景を癒す。一切の主張も特別も無く、さりげなさや素朴さの中でのみ育まれ、しなやかな活力となって姿を見せる、普通という言葉が、最も適格にそれを形容する。

非生命食でも元気でいられる人間に、その直感の世界は無い。滞りや隔たり(を元とする価値観)に支えられる彼らの思考の次元には、変化し続ける直感の普通は住むことは出来ない。その普通があるだけで、争いや衝突からはあたり前に無縁でいられる、この地上で生命を生きる、人間。そうではない(その普通を持たない)彼らは、過去を学び続け、知識を増やして、結果の世界を凝り固める。心を持たない蛇系の人間は、その性質をカラスやコウモリ化させて、覚えた(手にした)ことだけを頼りに、頭だけで、形ばかりの嘘の人生を生きる。

人間が持たなくてもいいはずの、不安や嫉妬。経験しなくてもいい、争いや差別。それらは皆、知識や思考世界に価値を置く人間たちの、その歪な、腐敗菌のような生の原因によるものである。中庸を基とする生命としての必要性がそこに無ければ、知識が担う仕事も、非生命の原因のそれとなる。

6. 思考の働きとは別次のところでの実践(感覚的理解)を直

すれば、当然同質となる。そして、事の表層だけで判断するようになり、健全な違和感や感情の主導権の下地は無くなる。猫は、それを知って、一層可愛くなる。

猫の目は、蛇と同じ。(夜間の行動では)目に入るものは、自分の所有物(獲物)のようにして、執拗に、残忍に扱う。人間の前ではその変質振りを隠し通せる分、猫の方が人間にとっては手強い。飼い猫という発想も、彼らは利用する。

猫の舌の不自然さは、蛇に負けじと、他に静電気を流し込むためのもの。その舌に触れられれば、脳は心地良さを覚え、停滞感を安定させる。床や壁は、それによりべとつとした空気感を帯び、猫のものとなる。そして、知らない間に心身の不調の原因は固められ、猫の仕草を何より愛しいと思う。そんな猫が自らの唾液で行う、毛づくろい。密に接することのそれによる影響は、形ある(見た目で見取れる)原因を持たない分、しつこく残る。

睡眠時の猫からの攻撃は強烈で、一緒に家に居なくても(飼ってなくても)、そこに本来の普通があれば、その動きを封じようと、不可思議な働きかけがその次元で行われる。そのことは、人間にとっては全く自覚し得ないものなので、猫はそれを面白がり、愉しむ。猫の無意識(本性)は、滞りと不調の重石のようにして、あらゆるところで、変化の原因を壊し続ける。

7. 「直感」の文章は、そうであるべきこの時の原因が乗っているゆえ、読み進めるだけでも、動くものは大きい。そして、多数

が猫の世界との融合を良しとする次元に居るので(「ねこの日記」)、周りの反応も、これまでとは違うものとして伝わり出す。望むべく変化は、広く、深く、どんなどころの原因にも及んでいく。

そうとは分からせずに病みを生み出し続ける、形ある普通の中の、その歪な負の原因。ここまで来ると(頭になると)、それを仕向けた存在はかなり焦る。永遠に感知されないはずのことが、「再生」以降次々と把握されて、処理し得る対象として浮かび上がらされた事実は、到底信じ難い。それは、その世界で巧く作り上げた意味不明の災いの原因が、それを遥かに上回るここでの意味不明の健全な原因によって余裕で包まれていることを現す。無有日記が在る時代、全ては、無有日記の原因の中に在る。

そして、遊び心一杯の EW は、その姿無き存在をこの無有日記の次元に引き寄せ(招待し)、融合の主導権の握りごっこを面白おかしく楽しむ時を創り出す。全ての不調和と不自然のその原因となるそれは、一層の意味不明感を覚え、それに支えられていた歪な普通世界は、中から揺れ動く。これ程の楽しさは、どこにも無い。変わるべきものが、変わり出す。

せっかくなので、猫の嘘を軽〜く突っついてみる。(イメージで)尻尾の根元や後ろ足の付け根のその内側に手を入れたり、後ろ足の太股を両手で掴んだりすると面白い。彼らにとってはそれはあり得ないことだから、「直感」を普通とする人がそれを思うだけで、いろいろと意外な反応が生じる。その背後に

によって活躍する。

現在の人口の78%程が、コウモリ型として、その生を彼らの本質と重ねる(残りはカラス型)。人口増加の背景に在る、蛇色豊かなそこでの非生命的原因を把握すれば(「再生」)、それも領ける。コウモリと同じ夜行性である多くの人間は、昼はロボットのように知識(頭)だけでやり過ごし、夜間に(睡眠時も)本性むき出しの時を生きる。同質の猫は、それを応援し、カラスは、昼間の(人間たちの)過ごしやすさの演出役を担う。

そのことが体験的知識の域となる時、人の世には、心も感性も、その原因となる要素が全く育まれてないことを知る。蛇系のコウモリ型人間とカラス型人間の次元には、その原因(真)の常識的事実として、心という知識(思考)は有っても、心はどこにも無い。それへの余裕ある把握に、地球の望みは、温かさを覚える。

5.夜行性の動物はもちろんそうだが、昼行性であっても、太陽の光を避けるようにして生きる動物は、他の動物が(太陽の下で活動することで)体の中からムリなく外へと出そうとするその腐敗型の物質を、平気で取り込んだまま、それを体の一部として普通に生きる。その典型がカラスとコウモリで、どちらも自然界には珍しい黒色であることも面白い。

地中(地球)からの植物を主とはせずに、動物食を常とする人間も、中身は彼らと同じで、体内を腐らせ、重たさにも平気で、それなりに元気である。生命が摂るべき岩塩や全粒穀物

解な超音波活動と、それに利用される脅威の物質により、生き物たちの生命活動は、不自然さを馴染ませていく。

それらの全てを可能とするその原因の供給源として、地殻内に在る不安定なビスマス 214(202、215)もそれに参加する(地球本来はビスマス 166)。コウモリは、それとの共振を基に、超音波の負の威力を維持・安定させ、自分たちにだけしか出来ないことのその質を強めていく。人間の知の次元には無いヒ素 82 とビスマス 214 それぞれのその破壊・支配型の原因は、蛇系の人間ともムリなく融合する。

4. 哺乳類動物同士だと、互いは本能のどこかで同胞感のようなものを感じ、それゆえに、不要な衝突を避けて相手の生を尊重しようと、住み分けを普通に、他を生かし、自らも生きる。やむ無くそれが崩される時があったとしても、そのための自浄・調整力が失われることはない。

その感覚はコウモリには全く無く、相手の種が何であれ、攻撃し、傷つけ、素知らぬ顔で腐敗を呼び込む。その悪影響の及ぶ世界を考えると、彼らは、胎生動物でありながら、哺乳類の本来を備えない、驚異の特殊本能の持ち主であるということが分かる。

その影響下に在る、この国の自然環境。それを良しとする、蛇絡みの本性を持つ人間との共存は、コウモリに生きやすさを与え、彼らの本能は満足する。人間も、コウモリに支えられ、その暴力的な非人間性は、彼らの超音波に乗るヒ素の原因

居る存在も、どうしていいか分からなくなる。猫絡みのしつこい病みが、じっとしてられなくて動き出す。

8. 地球が安心する、一生命としての原因を生きる人の何気ない直感(想い)は、同じ地球が安心するくじらのその多次元的な普通の能力と呼応するようにして生じる。

地球が辛くなる、人間だけの世界で結果を生きる人の直感(思考)は、同じ非生命的な猫のその直線的な感情と同一化するようにして生じる。

前者は、あたり前に思考を自由にさせる中で訪れる、経験の記憶がジャマ出来ない中での、平和と健康の原因を基とする発想。

後者は、思考を自由に使う中で導き出す、感情の記憶の中での(そこに結果として在る)、優越や差別を基とする考え。

直感という言葉が表す世界には、全く次元の異なる2つが在る。それは、地球(安心)と非地球(怯え)の違い。

くじらは、地球感覚を生きる生命たちとのコミュニケーションを普通とし、人間に対してのそれは、よりきめ細かに、力強く行われる。無有日記によってその間口(感度)を広げた人間たちは、思考による判断の域を余裕で外せるからこそ、そこでの通常には無い音(音波)でそれを感知し、自動的にそれに応えている。直感の質は、自ずと地球と繋がる。

くじらは、いつの時も、地球と共に生きる人間たちを見守り、これからもそうである。そして、現代のその地球規模の重要さ

を知る彼は、これまで以上にこの時の人間たちを応援し、彼らは、一生命としての人間のその原因を高めることで、くじらとの融合を限り無く活かす。その姿を、地球は微笑ましく思う。

地球の望みとなる、生命世界に在るべき、本来の変化。そこでの必要性は、確かな変化に乗り、ここに「直感」の時を迎える。これまでに経験した生命としての変化と、そのことが生み出す、自然界の生命たちの望む新たな変化。その全ては、地球との約束。海の仲間たちとの共同作業。それを繋ぎ、成長させ、生命本来の普通で地球を包み込む。そうであることの原因でい続ける今が、時代を乗せて、地球を周る。(by 無有 3/13 2019)

りに及ぼす。

コウモリが宿主となる感染症は、狂犬病が有名だが、その他にもいくらでもある。人間も、直接・間接的に害を被れば、普通ではいられなくなり、太陽の下で生きる自然体の動物たちは、コウモリに寄生する吸血性の虫などによって、強い感染症他の経験をする。

3.夕暮れの頃からその働きを活発化させる、コウモリの超音波。自然界のあらゆるものへと発信されるそれは、そこに在る自然な様を容易に不自然にし、生き物が安心して生きる姿を決して許さない。自然界に生きる生命たちは、その理由も分からずに要らない負荷を強いられ、それを普通に、生の質を落とす。それは、実に理不尽な現実。

人の世の重たさにも、同質の人間たちと共にその原因づくりに参加する、コウモリ。反射物からの超音波を時間で計り、距離を定める能力は、人間の思考の次元からすれば、まさに超能力。それをあたり前とする彼らの動向により、世は常に緊張し、自然な流れを忘れさせられる。この地(国)は、彼らの超音波の中に在る。

その能力にも、当然それ特有の物質(の原因)が在り、それは、カラスと同じ鼻の奥に在る。破壊力の材料でもあるそれは、不安定なヒ素。地球本来のその元素(66)が大きく変質したことでその威力を手にしたヒ素 82 は、コウモリの本姓・本質とキレイに溶け合い、驚異的な負の力を発揮する。限り無く不可

な生態を武器に、人間本来や動物たちの生命本来を力無くさせていく。

2. 空飛ぶ哺乳類というだけで、奇異な感覚を抱かされる、コウモリ。その誕生は、地球を生きる生命たちのその人間経験を潰し切るために、地球自然界の無生命化を進行させようとする意思によってもたらされ、彼らは、その独特の生態からなる破壊力を成長させつつ、それまでに無い強烈な存在感を示す。およそ 430 万年前に始まったその試みは、200 万年程前に現在のような姿となり、その後、幾つもの種が生まれ、今に至る。

超音波による破壊力と吸血害虫の宿主役が安定して備わり出したのは、蛇絡みの人間が姿を見せてから(3 万数千年前)。彼らの人としての感性の無さと融合は、コウモリたちの凶暴な内面を刺激し、その非生命力を増大させる。非地球そのものの蛇(の原因)を介して蛇系の人間と繋がったコウモリは、世を暗く、動きの無いものにするために、その嘘の人間たちと協力関係を保つ。

彼らは、他のどんな動物にも無い脳(能力)を持ち、暗闇の中でも自在に飛び、動き回る。しかも、色は黒。昼行性の動物はもちろんのこと、夜行性の動物であっても、意識を向けられると、何の自覚もなく動きが鈍り、かすかな反応を促されて、襲われ、傷を負う。対象となった体の大きな生き物は、唾液を介して入り込んだ菌によって脳をおかしくされ、その影響を周

直感 (2)

1. 形あるものは全て、その手前の形無きところから始まり、形あるところからのみ始まるものは、どこにも無い。そのことを考えれば、何気ない思考も、感情も、その影響に対して無責任ではいられない。

その責任ある原因を普通とするために、人は、生み出す形や引き寄せられる物を通して、その手前に在る形無きところの影響力を観察する。調和や友愛、公正さや健全さがあたり前にそこには在り、次の風景へとそれは繋がり、広がり行くものであるか…。そのことにより、原因と結果の違いも分からない、そのままありのままの平和と健康が人の世を包み込む。

その普通が普通ではなくなってしまった原因と、それへの対処を、段階的に形にしてきたこれまで。そのプロセスは、留まることなく変化し続け、地球本来という、地球に生きる生命たち全てにとってのその在るべき姿を元気にする。それは、無有日記の普通。普通だから、その質はどこまでも地球発の必要性に余裕で応える。

「復活」と「地球の真意」で、極微の粒子(分子、原子)の次元から無限大の太陽の外側まで、その(脳の働きの元となる)原因を自由に広げ、多次元的に遊んだ無有日記。そこでの経験は、生命本来の EW を高め得る材料となり、その原因は、どこまでも力強く微細なものとなる。

直感（3）

そうであることで創り出された、「直感」。地球の望みの実践編でもあるそれは、人間世界のその不穏で不自然な原因を、きめ細かく処理・浄化する。人間に託されたそこでの人間にしか出来ない仕事を通して、人間関わりの原因は大きくその質を変える。これまでの時が、それを可能とする EW となって通るべき新たな道を差し出し、そこでの案内役を担おうとする。

2. 重く、どんよりとした空間(天候)では、意気盛んに活動し、そうではないと、逃げるようにして姿を消す。がまん出来なくなると、仲間と一緒に姿を見せ、怒りを形に、その怯えの内を顕にする。それは、不安(怖れ)の裏返しでしか活動的になれない、形ばかりの人間のよう。自然界の健康的な風景を嫌がるその姿は、自然界に居るべき動物ではないことを現す。

数十万年前、蛇の空(小鳥たち)への嫉妬から生み出された(ような)カラスは、この地で誕生し、そこから外の地域へと広がっていく。脳は蛇と同質。黒色は、生命世界(太陽)への抵抗であり、声は、それに乗る非生命的な原因で健全さ(平和、安心)を破壊するためにある。蛇の支配欲とは常に融合し、狡猾な猫とは妙な協力関係を保つそこでは、敵対しつつ、向かう場所を同じくする。

蛇と悪趣味を共有するようにして動き回る、腐敗と混乱を本分とするカラス。彼らは、生命本来の原因(地球自然界に支えられる生命力)の高まりには敏感に反応し、異様な鳴き

1. 人間が、異物となる物質との関わりなどによって何らかの不調感を覚える時、多くは、そこに人間とは大きく生の形を違える虫や微生物の影響があり、それらを媒介して行われる腐敗・分断型の原因が十分に処理・浄化され得ないために、人は、心身の力を落とし、不要な痛みを経験することになる。

しかし、その殆どは、人間の持つ細胞レベルのその力量の変化・成長により、次第に余裕で対処し得るものとなり、問題の域からは姿を消す。生の基本が、健全さを普通とする地球との融合と一生命としての変化であるため、人間の心身は、留まる不調の次元を知らない。やむ無くそうであったとしても、それが動きの無い原因としていつまでも残ることもない。

ところが、そんな人間の普通が細胞レベルから確実に破壊されてしまうという、本来はあり得ないことを、そのための要素を全て持ち合わせる奇妙な動物によって、人は長いことどこかで経験していて、それでありながら、そのことが重要な問題として意識されることなく、そのまま現在に至り続けているという、その不思議な現実が、この現代には在る。

その動物は、元々この地球自然界には無かった夜行性という次元に居場所を確保し、太陽の光を避けるようにして、重苦しさの不健全さを生の基本に、非地球を生きる。蛇が可愛く思ってしまう程の影響を持つそれは、そのためとなる完全

に居ても、どんな風でも、皆、昔からの仲間。くじらは、「直感」の存在に癒される。

カラス関わりのは、猫の1よりも厳しさを感じさせる。それは、思考が触れ得ない経験の外側の、そこでの原因の実。そんな時は、くじらの目や、耳元に届いている彼らからの親しみの音(超音波)を、両手ひらで感じてみる。そのどちらも、蛇や猫、カラスたちが嫌う、地球発の原因。くじらとの融合は、地球が嬉しい原因を創造し続ける生命たちの、安心の時となる。

この原稿を書いているこの今は、2019年1月のラストの日。「仏陀の心」も「人間」もここに一緒に居て、「復活」や「地球の真意」が無かったあの頃を思う。仲間が増え、回転幅も広がり、余裕と安心は膨らんでいく。気づけば、共に歩む生命たちの原因は、強く逞しく、しなやかで柔らかい。そして、また、ここから。変化し続ける永遠の時(今)のそのひな型を、ここでの人間経験とする。(by 無有 3/21 2019)

方や行動で、威嚇と攻撃を繰り返す。人は、そのことで、不要に感情を刺激され、緊張と不調を抱く。カラスは、それに快感を覚え、何があっても平穏で柔らかな風景が生み出されることを阻止すべく、その素質(原因)を備える人間の普通世界を壊そうとする。

人や動物の本来が活躍できない場所を、カラスは殊の外喜び、そこに居る非人間性を普通とする存在たちと意気を合わせて、健全な違和感の持ち主たちを潰す。空間の流れが止まった(淀んだ)ままの神社なども彼らは好み、そこで守られることにも満足する。

健康的な息吹が伝わり出すことのないようそれを監視するようにしてカラスが姿を見せる地域は、それだけカラス化した非生命色を濃くさせていることの現れ。肉食を良しとする風土や、多くの病院、宗教施設などが活躍する地域にも、彼らは住み易さを覚え、それらを格好の空間とする。蛇系の人間同様、動植物たちがあたり前に元気である空間ほど、彼らには嫌なものはない。

3.かつて合戦場で、本能のままにその獰猛さを顕にしていた、カラス。彼らは、命を終えた(息の絶えた)人間ではなく、痛みを喘ぎ、どうにも出来ずに苦しんでいる人間のその体(顔)を突つき、遊び、食べる。その姿は、蛇も引いてしまう程の凶悪さ。自分にも羽があれば同じことが出来たのに…と、同質の猫は、それを羨ましがる。

人の命を物のように扱う権力者と息の合うカラスは、その本質をそのままに、現代でも、好き放題腐敗空間を広げていく。病み世の基礎づくりに貢献した蛇と、それを利用して世を操る猫。カラスは、その上での仕上げの役を担い、人間の動向の質を支配し続ける。

人間は皆、カラスの思うままの感情を働かせ、思考(頭)をそれに合わせる。形無き原因からの成長を放棄したロボットのような彼らは、カラスにその原因(本質)を売り渡し、彼の指揮の元、嘘を本当のようにして生きる。嘘の原因のまま、結果からでしか始まらないその不穏な(非人間的な)活動は、同質・同類の数の力にも支えられ、蛇や猫からも応援される。

中身がカラス化した人間の精神は、流れない腐敗型の思考で社会環境を重くさせ、それによって生み出される不自然な現実を、猫の舌でなめるようにして、(元はそのままに)表面だけキレイにする。その支え役に徹する蛇は、遠くでそれを眺め、静電気と湿度を絡めつつ、時を重苦しくさせて、それをほくそ笑む。

心ある人は、猫の本性によって脳の働きを鈍くさせられ、カラスの声を通して伝わるその残虐性に侵されて、思考の質を大きく低下させる。そこでは、心ある選択も、優しさも思いやりも力を無くし、それらを上手く思考で(言葉)で扱う人が、それになる。

4.腐った肉でも何でも口に入れ、それで何ともないカラス。そ

ば、止めようにも止められない事実だけが、次なる原因となって時を変える。嘘である本当に余裕で付き合えるぐらい、本当である嘘を楽しみ、実を変える。成長し続ける原因に包まれて、変わらないものは無い。

「直感」は、カラスの鳴き声の中に入って行き、彼らの動物的本能からなる異常な能力を力無くさせる。そして、何気ない声にその秘めた否定感情を乗せて事の主導権を握ろうとする(カラス化した)人間の、その作り物の直感を砕く。

カラスの声に潜む(乗る)その危うい原因を感じ取る人は、それに少しも違和感を覚えない人の感覚・感性は全て嘘の原因からのものであることを知る。そういうものだから…、それは仕方がないことだから…の発想が、どれだけ不健康な世界を支える原因となっているかということも、人は理解する。蛇や猫、カラスの存在に何の抵抗も無い人が、心と思考(言葉)をひとつにすることは、永遠に難しい。

8.どこかへ向かって行く姿勢も、何かを求め得ようとする気持ちも無い中で、さらりと普通に、「直感 1,2」の世界を感じてみる。それぞれのその中に入って行くような EW を自由に行ってみるのも面白い。ただそれだけのことなのに、動き出すものがある。自らの原因が刺激されて、新たに手にするものがある。

くじらは、その EW を支え、応援する。地球と共に生きる仲間として、彼らは、この時の人間時間を自分のことのように感じ、生命たちそれぞれの原因の変化に喜んで連れ添う。どこ

本来のモリブデン 84 は、クリプトン 72 と共に、奇跡的にも岩塩の中にその原因となる意思を残す。それゆえ、岩塩の次元との融合が普通となると、意地の悪さを秘めるカラス型の人間は、思いがけず焦り出し、その本性は不安定になる。猫もそれに反応し、影響力を低下させる。蛇は、静磁場の力を失くす。

安心と調和のある身体活動のその支え役のようにしてある、足の小指。不安定と混乱(腎臓と肝臓の不調)を安定させる歪なモリブデン 96 は、普通感覚を生きる人のそこを主に微量に在り(染み込まされ)、その 96 を支配する 99 は、本来の普通を尽く遠ざける人の小指を中心に在る。そのために、その自覚もなく不自由さを馴染ませてしまっていたこれまで。モリブデン 84 を復活させる。そのことで変わり出す世界は、実に面白い。

7.カラスは、かすかな音波を感知するようにして、思うままに動き回る。心ある風景のその原因の高まりには敏感に反応し、それを阻止しようと、凶暴さをしつこくさせる。それは、心無い人間も同じ。蛇色を濃くさせた、形式と過去を生きる人間は、心を育めないゆえに、違和感となる心の世界を身動きさせないようと、流れない価値観(歪な常識)でそれを囲い込む。

でも、いつまでもそれが通用するわけがない。そのために無有日記があり、ここに「直感」がある。阻まれながらも、感情を忙しくさせず、きゅう屈にされながらも、そこから自由でいれ

の消化機能の次元は蛇と同質で、それが意味するのは、それは地球には相応しくない、異常さそのものの動物であるということ(共食いを普通とする姿勢からもそれは分かる)。あらゆるものを獲物として捉え、執拗にそれへと向かい、賢そうに破壊していくその姿も、決して動物的知能(学習能力)のそれではなく、ただ単に貪欲さと凶暴さ(残忍さ)がけた違いなだけである。それを他の動物には無い賢さと捉える人間の中身は、カラス以下と言える。

そんな意地汚さを地で行くカラスと同質化すると、その人は、(他を隔てる)二者択一的思考を盛んに、内なる感情の質の動物(獣)化を強めていく。神話・神秘などの嘘の本当の世界にも興味を抱き、お金儲けや権勢のための妙な力も発揮する。思考の質のその危うさは、見た目でごまかされ、身を繕うための演技にも磨きがかかる。

それらは、カラスにとっては、実に好都合の脳の働き。非人間性が板に付いた人が居ると、カラスは、その人の腐敗を呼び込む直感の力となる。人としての本来を無視する生き方は、そのまま不気味な感覚・感性を生み出す原因となる。

自分の利益と都合がその基となる直感の類は、その性質が歪な本性(非情、非道)発の実践の一環であるゆえ、蛇や猫よりは、カラスのそれと重なり合う。そこでの研ぎ澄まされた感覚は、身の危うさに繋がることになる、公正・公平な目(原因)への病的な反応と言える。そこに潜む怯えと怖れは、カラスの脳と同じ。本来の息吹きを嗅ぎ分け、それを瞬時に阻もう

(潰そう)とするその無意識の意思は、カラス化した人間としての我欲まみれの感情(直感)を馴染ませる。

生き物が生命力を低下させていく姿のその腐敗型の原因を何より好物とする、カラス。蛇も猫も、カラス化した蛇系の人間も、カラスに先導されながら、皆で仲良く、病み世を安定させる。

5. 姿形は自然界に生きる一生命としてのそれ(鳥)でありながら、中身は全く次元の異なるものを備える、カラス。蛇や猫とも、その働きかけは大きく違い、人は、どこに居ても、彼らの鳴く声を聴き、それだけでも細胞は要らない経験をする。自由に飛び回りながら、広く大きく空間を病ませられる分、その影響は計り知れない。

カラスの驚く程の嗅(臭)覚の無さは、それ所以の原因の蓄積によるその反映と思ってよい。カラスの鼻の奥には、モリブデン 99 という不安定な粒子のその原因に反応する高密度の物質が在り、それが活かされた能力を行使するために、鼻は利かない。彼らの本分は、自然体による健康(の次元)を当然のごとく切り離しているため、全くそれで良しとなり、むしろそのことが凶暴さを安定させる材料にもなっている。

腐敗・退廃型の生を著しく成長させた(凝り固めた)存在がその気もなく可能とする、その物質との非生命的な融合。カラスは、その力を普通の域に安定させた、自然界では数少ない動物で、彼らの鳴き声からも、それは分かる。普通自然体の感

性がそれに触れる時、その声に乗る破壊・破滅の原因(影響力)は、強烈に響く。それに無感覚になることで、不調・不自然の下地はしつこく積み重なる。

潜めた怯えと怖れを材料にカラス化を進行させる人間は、蛇絡みの生がその土台にはあるため、元々から彼らと同じように、モリブデン 99 の原因を備える。ほんの微量であっても、心ある原因を簡単に押さえ込むそれにより、その存在たちは、非人間性を上手く操りつつ、狡さを普通に、差別と支配(独占)を生きる。カラスの本能と自らのそれを重ねながら、人としての本来の風景を、そうとは分からせずに破壊していく。

6. 自然界の自然な様を否定する行為のみを生きる、カラス。その悪態・悪たれの心臓部となるその物質の供給源は、南米のある地域に在り、彼ら特有の次元を通して、それは注がれ続ける。

およそ 14 億 4000 万年前に、地球本来の物質から変異・壊変を経て作り出されたそれは(モリブデン 94、96、99)、その場所の地下深くに中型の冷蔵庫ぐらい(1 m³)の大きさとなって存在し、人間の次元を軽く通り抜けて、その異常の原因を発信し続ける。カラスの異様な生態のルーツは、それに支えられ、活かされる。

(その破壊の燃料源となる核と密に融合すると、凶悪・凶暴な攻撃(抗戦)力が強力になり過ぎて自滅してしまうので、カラスには、南米は住みにくい場所となる)